

町長ひとくごと

(28)

齊藤 讓

三月末のある日、一通の手紙が、一冊の本に添えられて手元に届いた。

「歳月は人を待たずといわれておりますが、私もいつしか七十三歳を迎え、体力の限界を自覚して参りましたので、後継者のないまま営業を止めざるを得なくなりました。

あの栗山橋の袂に田部屋書店を興したの

文化を運ぶ



本の大好きな町長さんには、随分とお引立てを頂きまして本当に有難うございました。心より厚くお礼申し上げます。

この用語集をご覧になる時がございました折は、どうか田部屋を思い出して頂きとうございます。

ご健康・ご多幸をお祈りいたします。

廃業届は、三月三十一日付で税務署に提出いたしました。

角書店は、当時地域の人々の目には、どのように映ったことであろうか。

私も小さい頃に、親に請った小使いを握って、栗山川の堤防を歩いて田部屋さんまで、漫画雑誌などを買いにいったものである。家に帰るのを待ちきれずに途中の草原に腰を下して、貧るようにつけてきたばかりの本を読み耽つたとき、あのインクの匂いと感

動は、いまでも忘れることができない。

山の中で育った田舎少年の私にとつて、橋場や横芝は正に街場であり、遠く憧れの地であつて、時折訪れる田部屋書店は、心ときめきの場所であつた。齊藤さんが、自転車に本を入れた箱を積んで配達する姿を、私をはじめ見たのは小学校に入学してからのこ

とである。その後は、友達の家や、学校の行き帰りにでもよく見かけるようになった。

私は、齊藤さんが積んでいるあの箱の中には、どんな本が入っているのか、その配達先はどんな家庭なのだろうか、いつも興味深げに眺めていた。

私の家では、あまり本などを買うこともなかつたから、本の沢山ある家や、齊藤さんが配達に行く家庭がとても羨しかった。

今考えると、あの頃はどのこの農家も蔵書は貧しく、先生や勤め人の家庭の方が豊であつたように思う。

だから、たまに先生などのお宅へ伺つて、書架に詰つた本やピアノなどを見ると、自分の家庭とは比較にならない文化や教養の違いを感じて、思わず身を小さくしたりもした。

田舎少年が抱いた「文化コンプレックス」といったところであろうか。

齊藤さんから届いた一通の手紙を、様々な思い出が走馬灯の

ように浮んでは消えていった。齊藤さんが、本を配達して走り続けてきた四十年間の道程は、文化を運んだ道程であり、齊藤さん自身は、文化の配達人であつたと私は思っている。

これから、もうあの齊藤さんの姿をみる事ができなくなるかと思つと妙に淋しい。

しかし、この道一筋に走り続けてきた齊藤さんの姿は、意外なほど若々しく、そしてその表情も明かるい。

そこには、黙々として一隅を照らして続けた、男の自信と誇りが滲み出ているようである。心から、「ご苦労様でした」の一言を贈りたい。

ところで、今この書店も大型化し、店頭にはあらゆる種類の本が氾濫している。そのわりには、家庭の書架の淋しさが気にかかる。生活の豊さは、文化の質と量で決まるといつても過言ではない。

今こそ、家庭の窓と財布の紐をちよつぱり開けて、五月の薫風とともに文化の風を呼びこみたいものだ。